



人と機械の未来 (4月のごあいさつ)

平成28年4月1日(金)

4月は沖縄の新年度の始まり、同時に夏の始まりです。

以前、ある講演会で、講演者のエーデルワイスの比屋根会長に次のような質問をした。

(質問)お菓子の歴史は、技術の歴史、味に対する無限の追求…というお話を聞きながら、一方では評判を取って、当って売れば工場を造り、機械を導入する。そうすると、物的な機械の役割が増し、人と機械の合作となります。企業は、投資回収のために規模や利益を追求せざるを得ません。

それが進むと、機械が主となり人は押しやられるようになります。現状の空港の売店、スーパー、コンビニのお菓子を見ると独創性を失っています。少々の独創性があっても直ぐに真似られてしまい、人の役割は機械に代わられつつあるようにも見えます。

技術的に、人間が機械に負ける…そのような将来は心配ですし、どのようになるのでしょうか。そんな疑問が湧いてきて質問させていただきました。

(会長)人は魂を持っている、人は伝え合って考えやアイデアや技術を共有できる。人間は文化を創れる。長年に渡りそれをやって来た。成功は(勿論失敗も)人間だけのもの、人がすべての出発点であることを忘れることなく、仕事に当ればほんとうの価値を生むでしょう。

人と機械の競争の歴史の中で明確な転換点は、ロボットや人工知能の実用化ではないだろうか。進化したロボット、人間労働に代わる無人システム、人のように業務に対応する人工知能が現実化しつつある。クイズ番組ジェパディにおいてチャンピオンとなったワトソン、銀行や生保のコールセンターで、複雑な質問に対して人工知能がベテランの従業員レベルで回答する状況を見ると、人間の脳がプログラム化されるのも間もないのではないかと思う。

人は手だけを雇うことはできない、感情も人格も雇用することになる。その人の能力の向上が企業の成長となる。機械を超えた能力を有していた人間は、産業革命から今まで常に機械に打ち克ってきた。しかし、機械が学習するディープラーニングやグーグルやIT関連企業の人工知能研究所の開設をみると、今や機械に勝てない分野が加速度的に増加している。人間に残された心や直感、文化とか芸術などの機械に無いものの**価値**を高めていけるのだろうか。本能とか感情といった生物的部分だけに**退化**してしまうのだろうか。